

最近の「教育問題」で感じること

あいこう かずひろ
愛甲 和弘

自動車総連・労働政策室・調査グループ長

最近、ニュースや新聞・雑誌で学校や教育に関係する話題を目にすることが多くなったと感じる。国家レベルで言えば「教育基本法の改正」であり、社会的な問題としては「いじめ」といったものがある。遡ってみても「学力低下」や「学級崩壊」「不登校」「体罰」等々、ここ数年でも数多くの教育現場における問題が取り上げられている。私は不惑の年を迎える一歩手前であるが、私が子供の頃も「校内暴力」や「管理教育」など、学校や教育に関する話題が無かった訳ではないが、間違いなく今よりも少なかったように感じる。私は、教育に携わった経験もなく、また子供もおらず、まさに門外漢ではあるが、私なりに感じるところを書いてみたい。

現在の状況は、「知育」「徳育」「体育」全ての面で問題を抱えた状況といえる。「知育」については、数年前に行われた学習到達度調査で世界的に見た日本の相対的な位置づけが低下したことが起因していると言われる。ゆとり教育との因果関係等が大きく取りざたされているが、決して学習する時間や機会が得られない環境になったということではなく、「自ら進んで学ぶ」という意欲・姿勢を持たせることができるかどうかを最も重要と感じる。「体育」についても、基本的には「知育」と同様と思うが、現代は子供達が外で安心して遊べる社会環境とは言えず、地域を中心とした大人がそうした環境を作っていくことが必要と感じる。そして、ある意味「知育」「体育」の基礎となるものであり、人として最も大切なものが「徳育」である

が、今の社会で最も不足しているものと言える。幼い頃から家庭や地域生活の中で育まれていくもので、その積み重ねが人としての「常識」であり「節度」であると思う。幼い頃、悪いことをすれば、当然両親や近所の方から厳しく叱られ、その積み重ねで物事の善悪をはかる物差しが、知らず知らず自分の中に形成されていったと感じる。多分その物差しは、今も大きく変わることなく、自分の中に残っていると思う。

それでは、こうした「徳育」が不足しているという問題にどう対処すればよいのか。少なくとも学校教育を見直すだけでは不十分と考える。当然、学校生活で身につく「常識」や「節度」もあるが、中心となるのは、やはり家庭であり地域である。その中でも、「父親」の存在が大きいと考える。ただし、今の父親の置かれた状況は極めて厳しいというのが実態であろう。肉体的・精神的にもハードな仕事に追われ、休日も体力・気力の回復に費やさざるをえないといった具合に、自分の時間や思考の大半を仕事に奪われてしまっているのではないだろうか。最近、労働者側と経営者側双方から「ワーク・ライフ・バランス」という言葉を耳にするようになった。仕事と家庭生活のバランスをとることだが、家庭教育の観点から見ても、非常に重要な取り組みになると受けとめている。かくいう私も労働組合に身を置く者として、企業労使間の問題だけでなく、社会で起きている事象やその背景にある問題への考察、その中で果たすべき労働組合としての役割など、広く社会に目を向けた活動を心掛けていきたい。